



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	山田, 祥子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11061号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53787
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiko_Yamada_review.pdf, 「審査の要旨」



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 田 祥 子

主査 教 授 津 曲 敏 郎
審査委員 副査 教 授 佐 藤 知 己
副査 准教授 高 瀬 克 範

学位論文題名

ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究

1) 審査日程

本論文の審査は次のような日程で行われた。

平成 25 年 4 月 12 日 審査委員会発足
平成 25 年 4 月 15 日 第 1 回審査委員会：論文の配布と審査日程の調整
平成 25 年 5 月 13 日 第 2 回審査委員会：論文内容の検討と問題点の整理
平成 25 年 5 月 20 日 口頭試問の実施
平成 25 年 5 月 20 日 第 3 回審査委員会：口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定
平成 25 年 5 月 24 日 第 4 回審査委員会：審査結果報告書案の検討と確認
平成 25 年 5 月 29 日 第 5 回審査委員会：審査結果報告書の確定
平成 25 年 6 月 7 日 研究科教授会において審査報告
平成 25 年 7 月 19 日 研究科教授会において審査、学位授与承認

2) 審査経過概要

第 2 回審査委員会において、論文の構成・内容をチェックし、問題点や確認すべき点を洗い出した。口頭試問において、論文提出者から内容の概要について説明を受けた後、各審査委員から質疑がなされた。引き続き行われた第 3 回審査委員会において、学位を授与することが妥当であるとの判定を行った。ただし若干の軽微な不備が指摘され、その部分については訂正を求めることとした。これを受けて、主査を中心として審査報告書原案の作成に取りかかり、第 4 回委員会において報告書内容の検討を行い、第 5 回委員会で確認を行った。

3) 本論文の観点と方法

本論文は、サハリンのツングース系少数民族言語であるウイルタ語について、その北方言の動詞活用体系を中心に論じたものである。ウイルタ語研究には先駆者として池上二良・北海道大学名誉教授が大きく貢献してきたが、現在すでに話者数は僅少であり、文字通り「消滅の危機に瀕した言語」である。

本論文提出者は、学部時代からこの言語に取り組み、卒業論文と修士論文では、池上教授採集の民話テキストを資料として文法的分析を行った。博士課程進学後はみずからサハリンに赴き、長期留学も含めて現地調査を実施した。その中で、池上教授による精緻な体系的記述研究がある南方言に対して、北方言の研究が立ち遅れていることに着目し、北方言の体系的記述ならびに南方言との比較に自身の研究の目標を定めた。さらに、南北方言の差異を考察する中で、他言語の影響という視点が必要であることに気づき、言語接触の問題や民族関係の歴史などにも関心を寄せるようになった。

本論文では、こうした観点のもと、先行研究とりわけ池上教授の分析やデータを参照しつつ、自身のフィールドワークによって得られた一次資料をフルに活用している。北方言の共時的記述をめざしながら、南方言との比較や他言語からの影響による通時的变化や言語動態をも視野に置いて、総合的見地からこの言語の実態と歴史の解明を試みるものである。

4) 当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

1. ウイルタ語について、内外の先行研究を踏まえたうえで、自身の観察と調査により言語状況の現状と研究上の課題を明確に示した点。
2. これまで記述が少なかった北方言に注目し、南方言との比較からその特異性のいくつかを具体的に検証し、提示した点。
3. 言語接触や言語動態を視野に、言語事実の共時的記述にとどまらない、歴史の解明をめざす研究の方向性を示した点。
4. 危機言語であるウイルタ語を現地調査によりデータ収集・分析し、豊富なテキストを精密なカタチで提示した点。また、これにより研究資料としてのみならず、民族言語文化の復興や教育に貢献しうる材料を提供した点。

5) 学位授与に関する委員会の所見

本論文提出者は卒業論文以来一貫してこの言語に取り組み、大学院在学中から着実に成果を発表してきた。すでに内外の研究者やウイルタの人たちからも認知・信頼を受け、将来を期待されている。ウイルタ語というそれ自体ユニークなテーマのもと、先行研究を十分に踏まえたうえで、自身の独自の目標を見出し、将来の方向性を見据える姿勢は高く評価できる。

審査の過程において、構成上・表現上の問題点や先行研究への言及が不十分な点など、いくつかの改善すべき点が見出されるとともに、音韻・文法分析上の具体的な疑義や言語接触の議論のもの足りなさも指摘された。しかし形式や表現の問題は十分修正可能な範囲であり、内容上の問題点についても執筆者自身が課題として十分に認識しており、むしろ今後の研究の展開がおおいに期待できる部分であると判断される。限られた条件の中で、これだけのテキスト・データを収集し、ここまでの分析を加えることは、危機言語の調査研究において大きな困難を伴う作業である点を考慮すれば、こうした瑕疵は本論文の価値を損なうものではない。

全体として本論文は、独自のデータと手堅い分析手法で貫かれており、理論と記述の両面できわめて高い水準にあると判断される。当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるに至った。